

夢中で泥遊び ステキな世界観

いま No.1551
子どもたちは

この小さな学び舎で

3

砂場や花壇の土に水を含ませる。お湯を足しながらこねた土は、泥水になったり、表面に光沢がある粘土のようになつたり。ゆらゆらと湯気が立つ中、感触を確かめるようにして土に触れる姿は、まるで職人のように見えた。

刺すような冷たい風が吹く12月上旬のある日。私立特別支援学校、愛育養護学校（東京都港区）の砂場やブランコがある表庭で、小2のしゅうすけくん（8）がひとり、黙々と土をこねている。

しゅうすけくんは、お湯をひいた緑色のホースを手に、

両手で持つほどの大きさの泥団子を作る時であれば、土と水の混ざったものを、庭にある滑り台に向かって投げる時もある。投げられた泥は、アート作品のようになり、滑り台の側面そのまま乾いていく。

「ひとりで土に向かってい



裏庭の花壇にホースで水を入れて遊ぶしゅうすけくん。大羽太郎先生は、シーツを張ったり、土を置いたりしながら見守る＝東京都港区

るように見えて、実は周りをよく見ている」。担任の高石史子先生（49）はそう話す。幼稚部の子どもたちが興味深そうに近づいて来ると、しゅうすけくんの遊び方も少し、変わるという。「何より、しゅうすけくんの遊びにはステキな

世界観があることに、子どもたちはみんな気づいている。だから、自然にふわっと人が集まるんです」
12月中旬。この日も裏庭でホースを持つしゅうすけくんを目にした大羽太郎先生（52）は、すぐ近くに古いシーツを張り、傍らには土の山を置いた。「子どもの投げかけていることに応えたい。邪魔にな

らず、子どもの世界の近くにいられたら」と願うからだ。ひとりで泥団子を作っているように見える中で、自分の芯を持ち、自分の中の何かを造っている――。先生たちはそう感じている。

実習のために訪れている、東京家政大4年の後藤青葉さん（21）は、しゅうすけくんと半年ほどを過ごして初めて、絵の具を溶かした水をかけられた。ふわりとすくい上げるようなそのかけ方を思い出して、後藤さんは顔をほころばせた。「一緒に遊ぼうってことなのかな、って」
しゅうすけくんの世界は少しずつ、でも確実に広がっている。（円山史）